EOI (essences of the issue)

この4半世紀のあいだに，理学療法を取り巻く情勢や環境は著しく変化している．かつては，まず理学療法そのものを世に説明することが私たちの重要な仕事であった．すでに数千人のオーダーで新人が誕生する昨今では，想像できない時代である．いわば激動の波のなかで，従来のパラダイムの再検討がはじめられようとしている．

この転換点の現在に在ることの意味を含めて，今号では多角的な領域から分析を行っていただいた．

■パラダイム転換と理学療法（網本　和論文）

パラダイムという概念が持つ本来の意味は，限定的専門的な科学的業績を示している．この意味で果たして理学療法領域にパラダイムがあるのかどうかについて言及し，その上で「転換」を論じる必要がある．ここでは運動制御理論，動作パターンの分析，などを例にあげてパラダイム転換についての考察を試みた．

■疼痛の機序と治療におけるパラダイム転換（鈴木重行，他論文）

疼痛および鎮痛のメカニズムについて，理学療法士として知っておきたい神経生理学的知見と疼痛に対する理学療法の考え方および筆者自身が施行している治療展開について概説した．

理学療法により疼痛緩和を図るためには，ポリモーダル受容器の特性を知るとともに，同じ“痛み”をもつ病態であっても，理学療法の展開が異なることを理解し，理学療法がどの受容器をターゲットとして刺激し，その刺激による生体反応がどのようなものであるかを判断できなければならない．

■筋力評価法におけるパラダイム転換（山﨑裕司，他論文）

本稿では，下肢筋力と主要な移動動作能力の関連について多くの基礎データを提示し，筋力値に臨床的意義づけを行った．また，筋力評価法の問題点について指摘し，新たな装置による評価方法を提案した．最後に，これらの筋力評価法におけるパラダイムの転換が，理学療法士にとってどのような有益性を持つのかについて考察した．

■高次神経機能測定におけるパラダイム変換（杉下守弘論文）

大脳の部分的損傷で生ずる失語，失認，健忘などの高次神経機能障害の測定は1960年代に始まる標準検査という形式のパラダイム変換が現在進行中というのが現状である．正常脳の高次機能測定は1980年代になりPET，MSD，1990年代にはfMRIが登場した．これらの方法によりパラダイム変換が生じたといえよう．

■理学療法研究法におけるパラダイム転換（大渕修一論文）

統計学的手法に基づく研究パラダイムは，21世紀を迎えても揺らぐところがない．しかし，現在の統計学的手法で，理学療法の効果を示すことには多くの困難がある．医療費削減と結びついたEBMの安易な導入は，理学療法の効果を示すことができないばかりか，多くの患者の不利益となる．患者の利益を守り，かつ理学療法の科学性を高める研究パラダイムが必要である．ここでは障害予防を視野に入れた研究パラダイムを提案した．

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013
2026/09/18 11:50:42